

序 デジタル人文学が切り拓く 多宗教社会のメディアと社会 ——ジャウィ雑誌『カラム』を読み解く

山本 博之

本論集は、ムスリム（イスラム教徒）を多数派とする多宗教社会であるマレー・イスラム世界において、1950年から20年間刊行が続いたイスラム系月刊誌『カラム』(Qalam) を主な資料とする共同研究に基づいている。

『カラム』が発行されていた約20年を本共同研究は「カラムの時代」と呼ぶ。『カラム』が発行されていた時代という意味とともに、「カラム」が「筆」を意味することから、言論が力を持っていた時代という含意がある。これ以降の1970年代に入ると、国別の経済開発政策が本格的に進められ、社会全体の経済発展の前では個人の自由の制限はある程度やむを得ないという考えのもと、しばしば言論よりも開発が優先される時代になる¹⁾。「カラムの時代」は、戦争による荒廃からの復興および植民地支配からの独立、さらに独立後の国家運営のあり方について議会の内外で熱く議論されていた時期にあたる。

「カラムの時代」にアプローチするため、本共同研究では、『カラム』記事のテキスト精読による分析とともに、機械処理と数学的方法を取り入れた『カラム』記事の分析を試みてきた。本論集に先立つ13編の論集ではテキスト精読による分析を中心に行ってきたことを踏まえて、本稿では主にデジタル人文学の観点から本共同研究を振り返り、その経緯を具体的に記すことで今後の研究の方向性を考える一助としたい²⁾。

1. マレー・イスラム世界における『カラム』

(1) マレー語出版の中心地シンガポール

今日インドネシア、マレーシア、シンガポールな

1) 1980年代のマハティール首相は有害とみなす新聞・雑誌を黙らせるには停刊処分にはすれば済んだのに対し、後述するように、1950年代のラーマン首相は支持者の前で『カラム』を実際に火で燃やしてその有害性をアピールしなければならなかった。

2) 本編は『カラム』を利用した共同研究による論集の第14編にあたる。『カラム』およびプロジェクトの紹介については既刊の13編の序論と重なる部分がある。

どの国に分かれているマレー・イスラム世界は、本共同研究が主に扱う1950年代から1960年代にかけての時期、近代化という課題に直面した在地のムスリムにとって重要な枠組みであり続けた。かつての植民地国家がそれぞれ別の国家になる道を歩みつつも、国境を越えて共有可能な課題があることを認識し、互いの状況を参照しあうことで課題の解決が模索されていた。その背景には、出版を介した情報共有のネットワークや、越境によって異なる地域の事情を身をもって体験する人々の存在があり、シンガポールはその結節点の1つだった。

シンガポールは、19世紀初頭にイギリスの拠点が置かれて以降、交易の中心地として、域内移住者の一時滞在の中心地として、そしてイスラム教の教育と出版の中心地として、マレー・イスラム世界においてジャカルタやペナンと並ぶ重要な拠点の1つになった[Roff 1967:37]。

1876年にシンガポール初のマレー語新聞『ジャウィ・プラナカン』(Jawi Peranakan) が創刊され、マレー語出版メディアに大きな影響を与えた。1906年に『アル・イマーム』(al-Imam) が創刊されると、もっぱら文芸と地元社会の動向に関心が向けられていたマレー語出版メディアに社会改革という性格が加わった[Roff 1967:52]。1920年代にはマラヤ各地でもマレー語の新聞・雑誌が刊行されるようになった。1931年のマラヤの調査ではマレー人の成人男性の約3分の1が識字者で、1930年代にはマレー語出版メディアの刊行件数が大きく増えた[Roff 1967:166-167]。

1930年創刊の『ワルタ・マラヤ』(Warta Malaya) に象徴されるように、この時期のマレー語新聞はアラブ系またはインド系のムスリムが所有していた。1920年代にマレー・ナショナリズムが興隆すると、アラブ系やインド系ではなくマレー人によるマレー語出版メディアの必要性が認識された。休刊中だった『ウトゥサン・ムラユ』(Utusan Melayu) が1939年に復刊され、マレー人が所有してマレー人編集者に

よって編集される最初のマレー語新聞になった。

(2)ムスリムの団結による発展を訴えた『カラム』

マレー語出版メディアからアラブ系を排斥する動きに対し、マレー人もアラブ系も同じムスリムの同胞であるとしてムスリムの団結を訴えたのが『カラム』だった。

『カラム』はシンガポールで発行されたイスラム系月刊誌である。創刊者・発行者・編集者のエドルス³⁾はカリマンタン出身のアラブ系ムスリムで、シンガポールに移住してジャーナリズムに身を投じ、1948年にカラム出版社 (Qalam Press) を設立して、小説の出版などを経て1950年7月に『カラム』を創刊した⁴⁾。

『カラム』の特徴の1つは、当時のマレー語出版メディアとしては異例の長命の雑誌だったことである。シンガポール・マラヤでほとんどのマレー語雑誌が創刊から1、2年で停刊になっていた中、『カラム』は20年間にわたって発行が続いた(『カラム』は1968年にクアラルンプールに拠点を移し、エドルスの事故死によって1969年10月号をもって発行が終わった。本論集の山本論考を参照)。

『カラム』のもう1つの特徴は一貫してジャウィ綴りのマレー語を用いたことである。学校教育などを通じてローマ字綴りのマレー語が普及したこともあり、『カラム』創刊当時にはローマ字綴りで創刊されるマレー語雑誌が登場し、また、ジャウィ綴りからローマ字綴りに切り替えるマレー語雑誌もあった。ジャウィはイスラム教育を通じて身につけるものだったことから、ジャウィでの発行を貫いたことには、ムスリムが抱える問題をムスリムの間で議論する場を提供するというエドルスの意図がうかがえる[山本 2002]。

『カラム』発行の背景には、東西対立による政治的緊張のもとでムスリムが発展から取り残されることへの不安が存在した[山本 2002]。創刊号では朝鮮半島の分断や戦闘について歴史的経緯や戦闘の様子を

詳しく報じ、ベトナム戦争についても数号にわたって紹介している[坪井 2014]。1951年4月号に掲載されたイラストには、各国のムスリム男性が崖の上に立ち、それを崖の下の海中からアメリカとソ連を模した2匹のサメが虎視眈々と狙っている様子が描かれ、東西対立に巻き込まれるとムスリムは分断されて東西両陣営の「餌食」にされるという懸念が表われている[山本 2015]。

『カラム』はイスラム教の教えに照らしてあるべき国家や社会のあり方を説き、それに反すると見ると相手の地位や立場に遠慮せず激しく批判し、政治指導者や宗教指導者から発行や販売をしばしば妨害された⁵⁾。ただし『カラム』は教条的に批判しただけでなく、編集と執筆の方針は実社会への関心に裏打ちされていた。

連載・コラムのうち長く続いたものに、「社説」、「千一問」、「祖国情勢」、「女性の園」、「苦いコーヒー」、「月々徒然なるままに」、「我々はどこへ向かおうとしているのか」、「マレー語」、「宗教とは導きなり」、「コーランの秘密」、「コーランはイスラム文化の中心」、「イスラム国家」、「ムスリム同胞団」、「イスラム文化」、「言葉の広場」、「女性の世界」、「哲学と文化」、「イスラムの呼び声」、「芽を摘む」などがあり、宗教、政治、女性、哲学、言語、文化といった幅広いテーマが扱われていた。連載のテーマに関連する出来事が実社会で起こると、前号から続く記事は次号以降に先送りにして時事問題の論評を行うこともあった。

『カラム』創刊の背景には、第二次世界大戦後のシンガポールで若い世代のムスリムの間に見られる信仰離れなどに対する危機意識があった。エドルスは1956年にシンガポールのムスリム同胞団を結成し、人々に信仰に立ち返るよう呼びかけ、『カラム』はその事実上の機関誌になった[山本 2011]。

『カラム』誌上に掲載されたムスリム同胞団の団員名簿からは『カラム』の読者の広がりをうかがうことができる。『カラム』の読者はシンガポールとマラヤに多かったが、タイ南部やボルネオでも読まれており、それぞれの場所での反植民地運動に影響を及ぼした⁶⁾。

3) サイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス (Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus) は1911年にカリマンタンのバンジャルマシんでアラブ系ムスリムの両親のもとに生まれ、1930年にシンガポールにわたって出版・執筆活動を始めた。エドルスの伝記に[Talib 2002]がある。『カラム』の創刊者・発行者・編集者の名前はアフマド・ルトフィと知られてきたが、アフマド・ルトフィはエドルスが息子の名前を筆名にしたものである。本論集では文脈に応じてエドルスとアフマド・ルトフィを使っているが、両者は同一の人物を指している。

4) エドルスが1948～1950年に発表した小説群については[山本 2021]、エドルスが1953年に創刊した児童雑誌『こども』については[山本 2022a]を参照。

5) 1949年、エドルスが宗教指導者を批判する小説を発行すると、ジョホール州のムフティは同書に対して「買うこと、読むこと、用いること、書くこと」の四重の禁止を発した。1955年10月には『カラム』がマレー系与党を批判すると、同党の総裁であるラーマン首相は支持者に指示して同誌を燃やす示威行動を行った[山本 2002]。

6) 北ボルネオの脱植民地化に『カラム』が果たした役割については[山本 2006]を参照。

(3)多宗教社会の実情が反映された

読者投書欄「千一問」

「カラムの時代」には、植民地支配から解放された後に国家と社会をどのように運営するか、とりわけイスラム教の教えをどのように実践するかが重要な課題だった。

植民地支配を通じて世界の諸地域に先駆けて多宗教社会への移行が急速に進んだマレー・イスラム世界では、独立に際して、西洋起源の法制度をいったん受け入れた上で必要に応じて修正することで人間が決めた法律に従って社会を運営するのか、それとも神の法に従って社会を運営するのかという選択を迫られた。政党政治家の間では前者が優勢だったのに対し、新聞・雑誌には後者を支持するものが多かった。ただしこのせめぎ合いは政党政治家と新聞・雑誌の間だけで見られたのではなく、政党政治家の間でも立場の違いが存在した⁷⁾、新聞・雑誌の中にも立場の違いは見られた。

『カラム』の誌面にも多様な立場の対立が見られることもあり、それが最も顕著に現れたのが読者投書欄「千一問」だった。「千一問」は『カラム』の創刊から停刊までほぼ毎号掲載された人気の連載である。執筆者が特定のテーマに沿って自らの考えを記す他の記事と異なり、読者から寄せられた質問に『カラム』の執筆者が回答する形を取った「千一問」では、掲載される質問の選択に編集者の意向が反映される余地があったとはいえ、毎号並んだ質問群は当時のマレー・イスラム世界のムスリムを取り巻く現実が反映されたものだったと言える。回答は、神の法に照らしてあるべき姿を説くだけでなく、多宗教社会というマレー・イスラム世界の現実も踏まえて行われた。非ムスリムの異民族は国外に追放すればよいといった排他的な発想がなかったことは特筆に値する。

2. デジタル人文学と多宗教社会

(1)複数の参照基盤データとの参照関係を捉える

大量のテキストの全体の傾向を機械処理と数学的方法で捉える方法はデジタル人文学と呼ばれ、近年ではアラビア文字を対象としたイスラム・デジタル人文学の取り組みもなされている。本共同研究もそれ

らの取り組みの一端に位置付けられるが、研究対象が多宗教社会であることから、他のイスラム・デジタル人文学と研究の関心や方法に違う部分がある。分析の対象となる個別データ（本共同研究の場合は『カラム』の記事データ）を参照基盤データに照らして位置付けるアプローチの違いである。

イスラム教においては、神の警告や教えの最終版として下された啓示がコーラン（クルアーン）であり、その啓示を受けたムハンマドが言ったことや行ったこと、認めたこと、振る舞い、容姿などが伝えられて記録されたものがハディースである〔竹田 2024: 37: 44〕。

コーランやハディースのような法源に相当するデータを参照基盤データと呼ぶならば、1つのアプローチは、参照基盤データベースを整え、それに照らして個別データを位置付け評価することである。参照基盤データおよびそれを参照した個別データを1つの閉じた系と想定することで、参照基準データを中心とする個別データ群の位置付けを明らかにすることができる。

もう1つのアプローチは、互いに独立した参照基盤データが複数存在し、複数の参照基盤データを参照することで個別データが生成されるという想定に基づく⁸⁾。多宗教社会では1つの参照基盤データとの参照関係を見るだけでは実態をうまく捉えることができないことから、複数の参照基盤データとの関係を、その変化を含めて捉えることで、個別データを位置付け評価することが必要となる。

本共同研究では後者の立場をとっている。本共同研究がジャウィではなくローマ字翻字を用いていることもこの立場と関わっている。ジャウィすなわちアラビア文字を使ってテキスト分析を行うことは、マレー語以外のアラビア文字を使う言語と横断検索が可能になるなどの利点がある。ただし多宗教社会においてはイスラム教以外の参照基盤データとの参照関係も見ることが必要であり、そのためにはローマ字翻字の方が使い勝手が良い。本共同研究でテキスト分析にローマ字翻字を用いているのはそのためである。

7) 政党政治家の間では1950年のナドラ事件をきっかけにイスラム指導者の多くが政治の表舞台からいったん退出を余儀なくされ、前者の考え方が支配的になった。

8) この考え方はデジタル人文学以前からあった。例えばアンソニー・ミルナーは、テキストどうしが直接的に引用・参照しあう関係になくとも時間と空間を超えたテキスト上のやり取りを通じて公共圏が形成されるという観点から王国時代の文学作品を分析し、マラヤの左派と右派が互いに意見を戦わせながら1つの公共圏を形成したと論じた〔Milner 1995〕。

(2)「千一問」のカテゴリー分類

——米国議会図書館分類法とファトワ

機械処理によって『カラム』を捉えるために本共同研究が取り組んできたのは、抽出した単語群からどのように意味を見出すかという問題である⁹⁾。語彙の頻度や共起を調べることは比較的容易にできるが、そこから意味ある結果を導くにはさらに別の角度からの処理が必要となる。これに関して本共同研究は、記事をどのようなカテゴリーに分類するかを考えるという問題に取り組んだ。

『カラム』は20年間に228号が発行され、総ページ数は約1万ページ、広告等を含めた記事の総単語数は約360万語に上る。記事の内容は多岐にわたることから、精読による分析を効果的に行うためにも、まず機械処理によって全記事の全体像を捉えることが重要である。ただし360万語をただちに分析するのは難しいため、ある程度の量のまとまったデータを取り出して手作業で分類し、それをもとに360万語への適用を考えることにした。その対象としたのが「千一問」である¹⁰⁾。「千一問」の質問と回答の組は約700件¹¹⁾、総単語数は約21万4,000語で、手作業で処理できる範囲内にある。

マレーシアの大学図書館で米国議会図書館分類表が用いられていることから、まず米国議会図書館分類表による「千一問」の質問の分類を行った。「H:社会科学」が217件で最も多く、次いで「B:哲学・心理学・宗教」の210件、「G:地理・人類学・レクリエーション」が107件で、この3つで全質問数の約8割を占めた。「H:社会科学」の下位区分で最も多いのは「HQ:家族・結婚・女性」で「H:社会科学」の約6割を占めた。「B:哲学・心理学・宗教」では下位区分の「BP:宗教」が10割を占め、その下位区分では「BP176:五行」が「BP:宗教」の約5割を占めた。「G:地理・人類学・レクリエーション」では「GT:作法・慣習」が約5割を占めた。

米国議会図書館分類表を用いることで大まかにカテゴリー分けでき、どのジャンルの記事が多いかを

捉えることができた。その一方で、カテゴリー分けに困難や戸惑いが生じることもあった。例えば、民間信仰・習俗にあたるものは、米国議会図書館分類表ではアラブ、インド、土着などの由来によらずすべて同一のカテゴリーに分類されるが、マレー人の間では、アラブ由来の慣習はイスラム法上許容されるのに対してインド由来の慣習やイスラム化以前の土着の慣習はイスラム法上の逸脱と見なされることがあり、当事者の認識に照らした分類と食い違う可能性がある[光成 2020]。

また、米国議会図書館分類表では、異教徒との関係、華人の女兒養子の慣行、諸領域での男女の接触、文化的混淆から生まれた娯楽や芸能などが複数の項目にまたがって分類される。この方法では問いが発せられた背景や問いの根底にある問題意識を読み取ることが難しく、分類結果から質問の指向性が捨象されているように感じられた[光成 2021]。

これに対し、イスラム法学者が一般信徒の質問に対して示す法学見解(ファトワ)の分類項目を参照した分類を用いることで、『カラム』の読者が抱いた問題意識の指向性がより明確になったと感じられた[光成 2021]。ただし、米国議会図書館分類表であれファトワの分類項目であれ、ことがらと分類が一对一になるツリー形式の分類のもとでは複合的な問いが断片的にしか表現されないことから、複数のカテゴリー分類を組み合わせることが今後の課題である¹²⁾。

3. カラム・プロジェクトの展開

(1)『カラム』出版を取り巻くメディア状況

本共同研究では、『カラム』の分析に加え、『カラム』が置かれていた状況の理解を深めるため、1950年代のインドネシアにおけるジャウィ復活論[山口 2017]、マレーシアのダアワ(ダクワ)運動[野中 2017; 2018]、華人のイスラム教への改宗[篠崎 2017]など、『カラム』出版の周辺に目を向けた研究にも取り組んだ。

また、評伝などをもとに、1950年代から1960年代にかけてのマレー・イスラム世界のマレー語知識人の活動から『カラム』および「カラムの時代」を捉える研究も行った。マレーシアの国民的文学者アブドゥッラー・フサインの経歴と作品からは、この時期にマ

9) マレー語のテキスト分析では、どの接頭語・接尾語がついたものを語根と同じものとして扱い、どの接頭語・接尾語がついたものを独立した単語として扱うかなどの問題があるが、それらはマレー語のテキスト分析に伴う一般的な問題であり、本共同研究の直接の対象ではない。

10) 「千一問」の概要は[坪井 2016][山本 2020]を参照。

11) 1つの号に複数の質問がある場合にいくつと数えるかなどによって質問と回答の数は異なる。同一の投稿者による質問をまとめて1つと数えると640件[山本 2020]、同一の投稿者による質問でも意味によって分けて数えるならば701件[光成 2020]になる。

12) マレーシア国民大学のリリー・ハネファレザン(京都大学東南アジア地域研究研究所データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット・フェロー)との共同研究によりマレーシア側の分類に取り組んでいる。

レー・イスラム世界のマレー語出版メディアを支えた書き手は民族的出自が混成的であり、国境を越えて遍歴を重ねて民族間の交流を体現していたことがうかがえる[西 2020; 2021; 2022]。また、華人のマレー語知識人ルー・ボーイエは、シンガポール・マラヤとインドネシアの間を行き来することを通じて、国境を越えた思想の共有に重要な役割を果たしていた[篠崎 2020; 2021; 2022](本論集の篠崎論考も参照)。

(2)マレーシア・シンガポールとの連携 ——ローマ字翻字から共同研究へ

マレーシア・シンガポールの研究組織や研究者との連携は本共同研究の重要な部分である。共同研究の初期の段階では、『カラム』の記事精読による内容分析ではマレーシア・イスラム理解研究所 (Institut Kefahaman Islam Malaysia, IKIM)、『カラム』記事のローマ字翻字や記事データベース作成ではアカデミ・ジャウィ・マレーシア (Akademi Jawi Malaysia) との協力の上で進めた。

『カラム』記事データベースがオンライン公開されると、マレーシアやシンガポールで『カラム』を利用した研究が発表されるようになった。2019年以降にマラヤ大学、マレーシア国民大学、マレーシア理科大学などの国内主要大学が刊行するジャーナルに掲載された論文として、『カラム』の創刊者・編集者エドルスの研究 [Mohd Shahrul Azha & Arba'iyah 2019]、独立前のマレー人の「思考の枷」における『カラム』の役割の研究 [Mohd Shahrul Azha et al. 2021]、カラム出版社の設立と発展についての研究 [Mohd Shahrul Azha et al. 2022]、『カラム』から見たナドラ事件の考察 [Mohd Shahrul Azha et al. 2024] などがある¹³⁾。

4. 終わりに

本稿では、多宗教社会におけるメディアに関して、単一の参照基盤データとの参照関係のみにおいて個別データを捉えるのではなく、互いに独立した複数の参照基盤データとの参照関係において個別データを捉えるという観点から、「千一問」の記事のカテゴリ

リー分類の例を紹介した。

「千一問」のカテゴリリー分類の研究をさらに進める上では、多種多様な参照基盤データとの参照関係の調査が必要である。参照基盤データの候補の1つに『蕉風』(Chao Foon)の記事データベース [山本 2022b]がある。『蕉風』はシンガポール(後にマレーシア)で刊行された華語文芸誌で、1955年11月の創刊から今日まで刊行が続いており、『カラム』と刊行時期の重なりが大きい。

イスラム系総合誌の『カラム』と華語文芸誌の『蕉風』とは内容も執筆者も読者も重なりがほぼないという印象を与えるかもしれないが、どちらも西洋を含む世界各地の事例を多く参照しているという共通点を持つ。直接関わりがないように見えるものを含めた参照基盤データとの参照関係を調査することを通じて、多宗教・多民族社会のメディアについて考察がさらに深まることが期待される。

参考文献

- Milner, Anthony. 1995. *The Invention of Politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere*. Cambridge University Press.
- Mohd Shahrul Azha Mohd Sharif & Arba'iyah Mohd Noor. 2019. "Syed Abdullah Hamid Al-Edrus: Perjalanan sebagai Penulis, Penerbit dan Pengasas *Qalam*, 1950-1969". *Sejarah*. 28(1): 86-101.
- Mohd Shahrul Azha Mohd Sharif & Arba'iyah Mohd Noor. 2020. "Dilema Budaya Berfikir dalam Masyarakat Melayu dari Perspektif *Qalam* sebelum Merdeka (1950-1957)". *International Journal of Communication, Management and Humanities*. 125-135.
- Mohd Shahrul Azha Mohd Sharif, Arba'iyah Mohd Noor & Mohd Firdaus Abdullah. 2021. "Belenggu Pemikiran Masyarakat Melayu Islam di Tanah Melayu: Peranan Majalah *Qalam* sebelum Merdeka (1950-1957)". *Islamiyyat*. 43(1): 15-26.
- Mohd Shahrul Azha Mohd Sharif, Arba'iyah Mohd Noor & Mohd Firdaus Abdullah. 2022. "Perkembangan Syarikat Percetakan *Qalam* Press, 1948-1969". *Jurnal Komunikasi*. 38(1): 179-200.
- Mohd Shahrul Azha Mohd Sharif, Arba'iyah Mohd Noor & Mohd Firdaus Abdullah. 2024. "Di

13) このほか、国際会議のプロシーディングスなどには、『カラム』記事に見る独立前のマレー人社会の思考の文化の研究 [Mohd Shahrul Azha & Arba'iyah 2020]、『カラム』寄稿記事に見るマレー人の教育観の研究 [Siti Nurul Izza et al. 2023] などがある。

- Sebalik Isu Perkahwinan Nadrah: Tumpuan terhadap Pandangan Ahmad Luthfi dalam Majalah *Qalam* (1950-1963)”. *Kajian Malaysia*. 42(1): 341-365.
- Roff, R. William. 1967(1994). *The Origins of Malay Nationalism*. (second edition). Oxford University Press.
- Siti Nurul Izza Hashim, Nor Azlina Abd Wahab, Norafifah Ab Hamid, Mohammad Fahmi Abdul Hamid, Khairul Azhar Meerangani & Mohd Amirul Atan. 2023. “The Traditional Approaches in Malay Education: Matlob’s Perspective in *Qalam Magazine* (1950-1969)”. *International Journal of Academic Research in Business & Social Sciences*. 13(8): 232-243.
- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 篠崎香織 2017「華人のイスラム教への改宗(1950-60年代)に見るマラヤ地域の社会と国家」坪井祐司・山本博之編著 2017『『カラム』の時代Ⅷ—マレー・ムスリムの越境するネットワーク』(CIRAS Discussion Paper 68) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.35-40。
- 篠崎香織 2020「1950～60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差」光成歩・山本博之編著 2020『『カラム』の時代Ⅺ—マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper 92) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 61-74。
- 篠崎香織 2021「マレー世界における華語作家の国家構想: ルー・ボーイエと1940年代のインドネシア文芸界」光成歩・山本博之編著 2021『『カラム』の時代Ⅻ—マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper 101) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.61-69。
- 篠崎香織 2022「女性の活躍に託す新たな秩序構築: 日本占領期・インドネシア独立期を舞台としたルー・ボーイエの小説」光成歩・山本博之編著 2022『『カラム』の時代Ⅼ—マレー・イスラム世界における移動とジェンダー規範』(CIRAS Discussion Paper 106) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.50-57。
- 竹田敏之 2024「デジタル化される聖典——クルアーンとハディースの音と文字」須永恵美子・熊倉和歌子編著 2024『イスラーム・デジタル人文学』、pp.36-65。
- 坪井祐司 2014「カラムが切り取った世界——写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編著 2014『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper 40) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.9-18。
- 坪井祐司 2016「コラム「千一問」について」坪井祐司・山本博之編著 2016『『カラム』の時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』(CIAS Discussion Paper 62) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.9-15。
- 西芳実 2020「アブドゥッラー・フサインの子ども時代——英領期マラヤの覗き見を通じたメディア体験」光成歩・山本博之編著 2020『『カラム』の時代Ⅺ——マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper 92) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.54-60。
- 西芳実 2021「アブドゥッラー・フサインのペナン時代(1939年～1941年)——英領期マラヤの結社と出版」光成歩・山本博之編著 2021『『カラム』の時代Ⅻ——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper 101) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.51-60。
- 西芳実 2022「アブドゥッラー・フサインの青年時代——脱植民地化期マラッカ海峡両岸地域の言語体験」光成歩・山本博之編著 2022『『カラム』の時代Ⅼ——マレー・イスラム世界における移動とジェンダー規範』(CIRAS Discussion Paper 106) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.38-50。
- 野中葉 2017「マレーシアとインドネシアのダワ運動の接点——インドネシア側の資料を用いて」坪井祐司・山本博之編著 2017『『カラム』の時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク』(CIRAS Discussion Paper 68) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.27-34。
- 野中葉 2018「マレーシアのダワ運動と高等教育機関のイスラーム化に対するインドネシアのインパクト——インドネシア人活動家イマドゥディン・アブドゥルラヒムを事例に」坪井祐司・山本博之編著 2018『『カラム』の時代Ⅸ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク2』(CIRAS Discussion Paper 78) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.41-49。
- 光成歩 2020「近代的な知の分類と東南アジアのムスリム社会——「千一問」質問群にみるムスリムの社会生活と知的関心の広がり」光成歩・山本博之編著 2020『『カラム』の時代Ⅺ——マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper 92) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.16-22。
- 光成歩 2021「マレー・イスラム世界の論題と女性イシューの位置——イスラム教に基づく知の分類方法による「千一問」質問群の特徴分析」光成歩・山本博之編著 2021『『カラム』の時代Ⅻ——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper 101) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.9-21。
- 山口元樹 2017「1950年代のインドネシアにおけるジャウィ復活論」坪井祐司・山本博之編著 2017『『カ

ラム』の時代Ⅷ——マレー・ムスリムの越境するネットワーク』(CIRAS Discussion Paper 68) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.9-16。

山本博之 2002「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20: 259-343。

山本博之 2006『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族意識の形成』東京大学出版会。

山本博之 2011「連載記事「ムスリム同胞よ、今こそ団結せよ！」」坪井祐司・山本博之編著 2011『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper 19) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.25-31。

山本博之 2015「イスラム雑誌『カラム』の風刺画」坪井祐司・山本博之編著 2015『『カラム』の時代Ⅶ——近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper 53) 京都大学地域研究統合情報センター、pp.14-16。

山本博之 2020「投稿欄に見る雑誌読者コミュニティへの参加の欲求——「千一問」の女性名の質問を中心に」光成歩・山本博之編著 2020『『カラム』の時代Ⅺ——マレー・イスラム世界の女性と近代』(CIRAS Discussion Paper 92) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.8-15。

山本博之 2021「戦後シンガポールの活気と混乱——アフマド・ルトフィ名義の小説群(1948～1950年)をもとに」光成歩・山本博之編著 2021『『カラム』の時代Ⅻ——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』(CIRAS Discussion Paper 101) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.44-51。

山本博之 2022a「児童雑誌『こども』に見るマレー・イスラム児童文学の試み」光成歩・山本博之編著 2022『『カラム』の時代Ⅻ——マレー・イスラム世界における移動とジェンダー規範』(CIRAS Discussion Paper 106) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.19-26。

山本博之 2022b「華語文芸雑誌『蕉風』の世界——総目次(1955-1999年)に見る言語と領域」篠崎香織ほか編著『蕉風・椰雨・犀鳥声——冷戦期の東アジア・東南アジアにおける華語出版ネットワーク』(CIRAS Discussion Paper 108) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.49-59。